

# 高等学校における男女共学化・中高一貫校化に対する 生徒の認識についての調査報告

新 川 壯 光\*  
藤 咲 智 也\*\*

調査校である A 校は2010年度に男女別学(女子のみ)の県立高等学校から、男女共学の県立中高一貫教育校へと改組を行った。学校の文化が大きく変容していく中で、生徒・保護者の注目するテーマである「男女共学」・「中高一貫」について、生徒の認識の変化を明らかにすることは、学校の運営改善のための資料として重要であると考えられる。そこで本研究では2012年2月16日、17日に大学入試を終えた高校3年生(女子校である際に入学した最後の学年)の女子生徒合計10名に対し、男女共学化・中高一貫校化についての事前のアンケート調査とインタビュー調査を実施した。

**キーワード：男女共学, 中高一貫, 高等学校, 生徒, インタビュー調査**

## 1 はじめに

調査を行った A 校は伝統のある男女別学(女子のみ)の県立高等学校であったが、2010年度に男女共学の県立中高一貫教育校へと改組を行った。高等学校については入学した生徒の男女比は2010年度15:227, 2011年度13:230と女子が非常に多くなっている。そのため男子生徒は2010年度入学生に関しては6クラス中1クラスに、2011年度に関しては6クラス中1クラスに集められており、日常的に男子生徒と接している生徒とそうでない生徒が存在している。中学校については2010年度79名, 2011年度80名が入学しており、男女比は2010年度42:37, 2011年度35:45である。

A 校では2010年の改組以来、筆者所属機関と協力して年2回、主に生徒・保護者を対象としたアンケート調査を実施している。1回は新入生と2010年度入学生に加えてその保護者、1回は全校生徒と保護者、教職員を対象としている。これらの調査では男女共学に関する質問は行っていなかったが、自由記述欄を設けており、そこで男女共学に関する記述が毎年見られていた。中高一貫については関連する質問項目を設けており、そこから中学生の高校生に対して交流する意欲に比べると、高校生の中学生に対して交流する意欲が低いことが伺われ、自由記述欄においても、中高一貫に関する記述が毎年見られていた。

そこで本研究では男女共学化・中高一貫校化の影響について生徒に対するグループインタビューを実施した。対象としたのは A 校が男女共学、中高一貫校となった変容を特に強く感じていると

---

\*教育学研究科 博士課程後期

\*\*教育学研究科 博士課程前期

想定される，女子校時代に入学した最後の学年である2011年度高校3年生である。筆者が学校側に協力を依頼し，担当教員より大学受験の終了した生徒の中から，2月16日，2月17日に参加可能な任意の生徒へ参加が打診された。最終的に2月16日に6名，2月17日に4名，計10名の参加者を対象に，事前のアンケートとグループインタビューが実施された。

インタビューは半構造化面接法に基づくグループインタビューの形式で行った。また対象者の認識を把握し，インタビューを円滑に進めるため，インタビューの直前に対象者に事前アンケートへの回答を依頼した。インタビューの場面においては，調査者側2名が，事前アンケートへの回答を元に男女共学化・中高一貫化について対象者に対してそれぞれ意見を求めた。

以下でその概要と結果について詳述する。

## 2 男女共学化・中高一貫化に関するインタビュー調査事前アンケートの概要と結果

### 2.1 調査の概要

インタビューを行う部屋に来た生徒に対して，インタビューで聞く内容に関するものであることを伝えて，アンケートに回答してもらった。

名称は「男女共学化・中高一貫化に関するインタビュー調査事前アンケート」としており，「調査趣旨」を示したうえで，男女共学化・中高一貫校化について8項目の選択・記述からなる質問を行った。（アンケート票の詳細は資料1）以下で各項目の選択結果と記述内容の概要について説明する。

### 2.2 調査結果

#### (1) 「A 高校を受験するにあたって女子高であったことが選択理由となっていましたか。」

表1 (1)の回答の分布

はい	4名
いいえ	5名
どちらともいえない	1名

(1)の質問に対しては対象者の回答が大きく分かれた。「はい」と答えた対象者はその理由として「女子高という貴重な経験をしてみたかった。」，「女子高ならではのオープンな所が良い。」，「先輩からの話を聞いて楽しそうだった。」という記述を行っており，女子高の性質への評価や先輩からの影響に加えて，女子高という存在そのものに希少価値を見出していたことが伺える。一方で「いいえ」と答えた対象者は理由として「レベルで選んだ。」，「むしろ最初は嫌だった。」，「文武両道であることが一番の理由。」という記述を行っており，A校の女子高以外の性質をより評価していたことや，中には女子高であることが選択をためらう要因になっていた生徒もいたことが明らかになった。

(2) 「A 高校を受験するにあたって共学化・中高一貫校化を意識していましたか。」

表2 (2)の回答の分布

はい	1名
いいえ	9名

(2)の質問に対しては「いいえ」と答えた対象者が非常に多かった。理由として「自分の1個下の学年の話だったので、特に意識はしていなかった。」など自分自身に直接影響があるとは考えていなかった対象者が多かった。「はい」と答えた対象者も「中学生の頃は共学のほうに行きたかった」と答えており、受験の時点では女子高が共学校に代わることに對して不安や反発といったものは、女子高に対する思い入れのあるなしに関わらず、生徒の間で強くはなかったことが推察される。

(3) 「自分がイメージしていた共学校と現在の A 高校とで違いはありましたか。」

表3 (3)の回答の分布

はい	4名
いいえ	1名
どちらともいえない	5名

(3)の質問に対して「はい」と答えた対象者の内3名は(1)で「いいえ」と答えており、必ずしも女子高に對して思い入れのある生徒の方が変化を敏感に感じているという訳ではない。「いいえ」と答えた理由として「共学になっても A 校らしさがもっと残った。」と共学化による文化の変容について述べた意見もあったが、「男子が少なかった。」「あんまり共学という感じがしない。」といった記述がなされたことから、実際の男子生徒の入学が少なかったことが違いを強く感じさせなかった大きな要因であることが推察される。

(4) 男子が入学するようになり、変わったと思うことはありますか。

表4 (4)の回答の分布

はい	5名
いいえ	3名
どちらともいえない	2名

(4)については「はい」と答えた対象者が比較的多かったが、その理由として、「色々な制限が増えてしまい、文化祭や体育祭などの自由がなくなった気がする。」「雰囲気ややはり女の子だけの時とはちがう。」といった学校行事や学校の雰囲気の変化について不満・違和感を持っているという内容が中心であった。

(5) 「中学生が入学するようになり、変わったと思うことはありますか。」

表5 (5)の回答の分布

はい	8名
いいえ	0名
どちらともいえない	2名

(5)については「はい」と答えた対象者が非常に多くなっている。その理由としては「人数が多くなるので、部活の場所など使えるところが少なくなった。お互い譲り合い。」など「部活動」に関する記述、「校舎のつくりの関係もあるが、だいぶ騒がしくなった。」「学校全体として幼い感じ、よく言えば若い感じになった。」など「学校の雰囲気」に関する記述、「合唱コンクールとか体育祭とか文化祭とか中学生も一緒にというのをよく考えないといけなくなった。」「学校行事など中学生と高校生は分けるべきだと思う。中学生中心で高校生が楽しめない部分もある。」など「学校行事」に関する記述の3つの内容が主に見られた。共に学校生活の変化について中学生を受け入れなくてはいけない葛藤と反発が推察される内容となっている。

(6) 「女子高時代からの伝統の継承をどう思いますか。」

(6)は記述のみを求めた項目である。その内容については男女共学化・中高一貫化による変化から「男子、中学生が入ってきたことで、女子のみが継承してきたものを引き継げるとは思えない。」という否定的な意見も見られるが、「先輩方が継承されてきたことなので、今後も継承してほしい」といった意見に代表されるように、伝統の継承自体については対象者のほとんどが希望していることが明らかになり、生徒の女子高時代から続く伝統への愛着が非常に強いことが確認された。

(7) 「A 高校となったことで今後どのような校風を作っていくべきだと思いますか。」

(7)も(6)同様に記述のみを求めた項目である。「正直あまり変えないでほしい。伝統を大事にしてほしい」といった(6)で確認された伝統への愛着を強く表す記述もある一方で、「女子高時の校風を継承しつつ、新しい校風を作った方がいい」という折衷的な意見に加えて、「A校は『元女子校』ではなく『新共学校』として作っていくしかない」といった「新しい校風」を強調する記述も見られた。「年齢・性別問わずに皆が楽しく過ごしていける校風」という記述からも、卒業を間近に控えた生徒達が女子高時代の伝統に愛着を感じながらも、多様になった後輩たちも愛着を持ってくれるような学校づくりを望んでいることが推察される。

(8) 「A 高校に入学して良かったと思いますか。また、その理由を書いてください。」

表6(8)の回答の分布

はい	9名
いいえ	0名
どちらともいえない	1名

「どちらともいえない」と答えた対象者も「A校ではなく、A女(女子高時代の通称)に入学したと思っています。」と女子高時代に対する愛着を示した記述となっており、対象者全員がA高校での学校生活に満足を感じていると述べている。その理由としては「先生も友達も素敵な人に出会えたから。」という教員・友人との関係に対する満足度の高さを述べる記述と「A女の良さがあるから。」といった女子高時代から続く伝統への愛着を示す記述が主であった。この項目は学校評価等のアンケート調査でも4件法の選択項目として加えられており、そこでも高い平均値を示しているため、多くの生徒が学校を評価している点であることを推察できるが、同時にこの事前アンケートとインタビューの結果が、学校に対して満足度が高い層を対象としたことに起因している可能性を示唆しており、調査の対象の代表性については留意する必要がある。

### 3 男女共学化・中高一貫化に関するインタビュー調査の概要と結果

#### 3.1 調査の概要

インタビュー調査は、A校教員1名の同席のもと、それぞれの日程の対象者全員に横並びに座ってもらい、調査者2名が質問と記録を行う形式で行われた。内容としては、上記で示した事前アンケートの項目の順序に従い、それぞれの項目の回答結果に即して、対象者それぞれにさらに詳しい説明を求めた。

#### 3.2 調査結果

##### (1) 「A高校を受験するにあたって女子高であったことが選択理由となっていましたか。」

この質問に対して16日の対象者からは「部活の先輩」「塾の先生」といった他者からの勧めやロールモデルの存在を挙げた。「部活」については「部活で私立が強いが、公立ではA校。部活もしながら進学も。」という発言があり、A校の文武両道という気風についても学校選択の理由として生徒から意識されていたことが伺える。

また「他の学校と違って女子校ならではのイベントがある。また男子がいないからこそ盛り上がりがある。」「他が共学になってきたことで。周りがみんな女の子でいい刺激。」といった「女子高独自の魅力」についてもA校の受験を検討する要因となっていたようである。

一方で「共学が良かったが、親に勧められた。(レベルの話)女子高が嫌だった。」など「女子高への抵抗」や「消極的選択」といった否定的な要素も見られた。

17日の対象者からも同様に「仲良かった先輩がA校に。」「先輩でインターハイにできるようなすごいスイマーがいて、一緒にやりたくて。ただ大学進学も考えて。文武両道で。」「女子校で制服があるのも。女だけの方が楽かな。」「女子校は怖いイメージがあった。共学で、進学・制服ありで行きたいところがなかった。」といった発言から「先輩」「部活」「文武両道」「女子高独自の魅力」「女子高への抵抗」「消極的選択」といった要素が確認されたことに加えて、「お嬢様学校というイメージ。あこがれ。」といった「学校の伝統による魅力」が選択する要因として挙げられた。

また女子高の選択理由として男子生徒を苦手としている可能性が予見されたため、「中学時代に

よく男子生徒と話していたか。」を聞いた所、「中学時代男の子と仲良く話すタイプではなかった。」と発言する対象者もいたものの、「男子とは中学は話しかけられれば答える。女子中心。」「中学では男子と普通に話していた。」という発言もあり、対象者群共通の性質とは判断できなかった。

(2) 「A 高校を受験するにあたって共学化・中高一貫校化を意識していましたか。」

事前アンケートでは「いいえ」と答えた対象者が多かったが、共学化自体は全員知っていたことが確認できた。それでも意識していなかったという理由は「どういう風になるかわからなかった。自分の学年ではないので実感がなかった。」という発言があったように「自分には無関係」という判断をしていた生徒が多かったことによると推測される。しかし「(女子高の状態が)楽しかった」ことから次の学年からの男子の入学に対して「入るとなった時には少し嫌だと感じた。」という発言が見られ、入学後「女子高への愛着」から意識の変化が生じたことが明らかとなった。

一方で始めから「行事がどうなるのか不安だった。」と述べた対象者も存在し、実際に「文化祭・体育祭が一番変わった。競技数の変化。女子クラスと混合クラスで力の差。」という発言があったように、「共学化による行事の変容」に対して不満を感じる生徒がいたことも確認された。

(3) 「自分がイメージしていた共学校と現在の A 高校とで違いはありましたか。」

この質問については「男子の数が少なくて、共学という気はしていなかった。そもそも学年には女子だけ。」といった発言があったように、「男子の少なさ」と「自分の学年には男子生徒がいない」ことから「共学校だと感じない」対象者が多かった。

そこから自分の学校を女子高と捉えたうえで、「共学校の友達から話を聞くと女子校との違いを感じた。」という発言にみられるように、「他の学校との比較」から「態度(早弁をするか、しないか)などが違う。」「お弁当を一人で食べる。他の共学校では必ず一緒。」「A 女の人は自由。思ったことややることも自由。机の周りも汚いことも。」といった「生徒の行動・文化の違い」を感じ取っていた。男子との関係についても他の共学校の生徒の話から、「共学校で仲悪い(男女で)を聞くと嫌かなど。必ずしも共学校の人にそんなに話は聞かないが。」「共学校で男女仲良い話は聞く。それを楽しそうとは思った。ただ自分は女子で良かった。」と共学校に対して肯定的感情、否定的感情両者を抱いていることが伺えるが、同時に「女子高への愛着」についても改めて確認された。

(4) 「男子が入学するようになり、変わったと思うことはありますか。」

この質問に対して中心となったのは「少人数でも男子がいるとやはり女子校の雰囲気が変わってしまう。」といった発言に代表されるように「雰囲気の変化」であり、校歌について「男子がちゃんと歌わない人がいたりして、校歌の雰囲気が違う。」という不満の声も聞かれた。

この他に部活動において男子生徒が在籍し、同じ練習メニューで取り組んでいることや後輩の男女関係について否定的な意見を述べる対象者も存在していた。

## (5) 「中学生が入学するようになり、変わったと思うことはありますか。」

事前アンケートで出てきた要素の中でも特に「部活動」についての発言が多く、「合唱部では中学生と高校生の声は全く違う。練習時間は中学生の方が部活終了が早く、異なるので大変。」と一緒に活動をするの難しさがありながらも、「地学部で施設に行くのに少し誘ってみた。」「合唱部で中学生も一緒に高校生の大会に出た。」「県民大会で中高一緒に参加して、一緒に応援したりした。」など、連携しての活動を模索していることが明らかとなった。

「学校行事」については「行事は人数が増えて高校生がやれる種目が減ってしまった。」「行事は中学生とは別にする機会があっても。特に体育祭、合唱祭などでは。中学生も中学生で楽しみたいのでは。」といった発言があり、「学校の雰囲気」についても「校舎がつつぬけで声が全体に響く。高1の時のイメージとかなり違い、中学校になったイメージで。」「中学生は頭がいいが、幼稚。自分たちは『高校』を楽しみたい。走り回る中学生が違う雰囲気。」といった発言があったことから、「高校生活」を楽しみたい生徒にとって中高一貫が否定的に捉えられている様子が推察された。ただ「中学生の何にでも取り組もうとする必死さは伝わった。」という発言もあったことから、中学生の存在が高校生に刺激を与えていることが明らかとなった。これは現在A校で課題となっている、中高一貫校化における高校生にとっての中学生がいることのメリットの明示にむけた、一つの示唆となりうるだろう。

## (6) 「女子高時代からの伝統の継承をどう思いますか。」

伝統の継承について「校歌とか校章は続いている。雰囲気は全く違ったものになってしまった。さみしい。」と「学校の雰囲気」を学校の伝統として捉える発言があり、「女が3学年、じゃらじゃらいるだけで社会と違う雰囲気がある。言葉でいうものではなく、そこにあるもの、とりもどそうとしてもできないものである。」と述べるなど「女子高の雰囲気」というものを他の場所では得られない希少な存在として価値づけていることが伺える。一方で「応援団に所属。壮行式の人文字のとき男子を入れるか、中学生を入れるかで話し合った。女子高のままではいけないと感じた。」という発言もあるなど、(7)にも関係する内容として、「変化への対応の必要性」を伝統の継承という場面においても意識している生徒がいることが明らかになった。

## (7) 「A高校となったことで今後どのような校風を作っていくべきだと思いますか。」

今後新しい校風については「伝統は残して行って欲しい。変えるにしても。」「人文字や行事は継承して欲しい。中高一貫を生かせるような形で。」と伝統を残したうえで現状に合った形を模索してほしいという発言があった。(6)で強調された「女子高の雰囲気」についても「一つのことではなくて、いろんなことを両立しようとしている人が多い。その雰囲気は変えないで欲しい。」「元女子高ならではの精神、謙虚さを大事に。中学から高校に進学する生徒は自己主張が激しいのを丸くして欲しい。高校では外部から入って来る人にも伝えて欲しい。」と高校だけでなく中学から進学する生徒にも共有してほしいと願っていることが明らかとなった。そのため男子生徒が増えることにつ

いては「中学生は男子が多いから、彼らが高校にいったら、しょうがないけど多くなると思う。」と「女子高への愛着」から消極的な態度が見られた。

**(8) 「A 高校に入学して良かったと思いますか。」**

ここでも「女子高ならではの雰囲気があって良かった。」といった発言が見られ、生徒たちの「女子高への愛着」が学校への満足に大きく影響していたことが伺える。共学校となった今でも「水泳部のインターハイで、下級生(共学化してから入った生徒)も『A 女のジャージを来て泳ぎたい』と言っていた。」という発言から、女子生徒の間には「女子高の雰囲気」や「伝統」に対するあこがれが残存していることが推察できる。この伝統を男子生徒が入学する障壁とならないようにしながらも、学校の魅力として維持・発展させることが今後の課題となるだろう。

#### **4 おわりに**

本研究では学校の体制が変わる中でその過渡期に位置する象徴的な生徒群を対象にインタビュー調査を行うことで、学校文化の変動期における生徒の反発・葛藤・受容の様態を明らかにすることを目指した。現在も A 高校では前述したように毎年生徒・保護者を対象としたアンケート調査を実施しており、男女共学・中高一貫に関する量的・質的なデータの蓄積を行っている。今後は男女共学・中高一貫に関する先行研究を踏まえたうえで、今回の研究資料と蓄積されたデータの分析を進めて、学校現場に運営改善のための有益な情報として提供しうる、質の高い研究に昇華させることを目指していきたい。



資料1 男女共学化・中高一貫校化に関するインタビュー調査事前アンケート

東北大学大学院教育学研究科 新川・藤咲

○調査趣旨

今年度実施したイメージ調査・学校評価において、生徒・保護者から男女共学化・中高一貫校化について多くの意見がありました。そこで、女子高時代を知る最後の学年である高校3年生のみなさんから、男女共学化・中高一貫校化について感じていることをお聞きできればと思います。

○以下の各項目についてお答えください。

(1) A 高校を受験するにあたって女子高であったことが選択理由となっていましたか。

1, はい 2, いいえ 3, どちらともいえない

(理由: )

(2) A 高校を受験するにあたって共学化・中高一貫校化を意識していましたか。

1, はい 2, いいえ

(理由: )

(3)自分がイメージしていた共学校と現在の A 高校とで違いはありましたか。

1, はい 2, いいえ 3, どちらともいえない

1を選んだ方は、特に違いがあったと思うことを具体的に書いてください。

( )

(4)男子が入学するようになり、変わったと思うことはありますか。

1, はい 2, いいえ 3, どちらともいえない

1を選んだ方は、特に変わったと思うことを具体的に書いてください。

( )

(5)中学生が入学するようになり、変わったと思うことはありますか。

1, はい 2, いいえ 3, どちらともいえない

1を選んだ方は、特に変わったと思うことを具体的に書いてください。

( )

(6)女子高時代からの伝統の継承をどう思いますか。

( )

(7) A 高校となったことで今後どのような校風を作っていくべきだと思いますか。

( )

(8) A 高校に入学して良かったと思いますか。また、その理由を書いてください。

1, はい 2, いいえ 3, どちらともいえない

(理由: )

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

# A Report of the Survey of Students' Recognition for Transition to Co-education and Integrated Secondary Education in the High School

Masamitsu SHINKAWA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Tomoya FUZISAKU

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

A school which is reorganized from the prefectural high school of Single-sex education (only woman) to the coeducational prefectural integrated junior high and high school in the 2010 fiscal year. While the culture of the school changes greatly, "coeducation" and "integrated secondary education" is the theme which students and parents observe and it is very important as data for a management improvement of a school to clarify change of the student's recognition. So, in this research, the prior questionnaire about coeducation and integrated secondary education, and interview investigation were conducted on February 16 and 17, 2012, a total of ten woman students of the twelfth grade student (grade of the last which entered a school when it was a girls' school) who finished the university examination.

Keywords : Co-education, Integrated Secondary Education, High School, Student, Interviews Survey